

祐天上人のりうつりの地蔵様

大正大学教授 玉山成元

深川の本誓寺に、もと祐天大僧正のりうつりの地蔵といわれた石刻の延命地蔵尊があった。身のたけ四尺の立像で、一名花懸地蔵ともいわれ、ご利益が多い地蔵さんとして人々から親しまれた。

いま清澄町にある本書寺は、当知山重願院本誓寺といい、文亀元年（一五〇一）飯沼弘経寺（茨城県）三世の酉岡上人が、小田原（神奈川県）に創建した寺であった。ところが天正十八年（一五九〇）三世文賀上人のとき、豊臣秀吉軍に攻められて小田原城は落城し、後、北条氏は滅亡した。そのとき本誓寺も消失したが、徳川家康が江戸に入ると、本誓寺も江戸に移り、文禄四年（一五九四）には日比谷門のあたりに庵を結んだ。そのころ日比谷あたりは海岸で、葦の原に数軒の漁民が住むというさびしいところであった。しかし慶長十一年（一六〇六）江戸城が拡張されることになり、本誓寺は馬喰町に寺地を拝願して移ることになった。そして水戸徳川家の頼房の母である英勝院の帰依をえて修築され、境内は整備され、

伽藍はととのつていった。ところが明暦三年（一六五七）、俗にいう振り袖火事のため焼失してしまった。そして天和三年（一六八三）現在地の清澄町に移ることになった。

祐天上人のりうつりの地蔵尊は、万治三年（一六六〇）七月、日本回国の修行者供黄のために造立されたものであるが、天和三年本誓寺が移転したとき、一緒に馬喰町から深川に移された。ところが正徳二年（一七一二）また火災にあい、本堂・庫裡をはじめ、残らず類焼してしまった。当時住職であった白呑上人は、八方に手をつくして復興に尽力したため、ほどなく伽藍は完成した。ところが六年後の享保三年春、近くで火災がおこり、せつかく完成した諸堂がまた焼失してしまった。また復興の疲労もぬけきらないときに、続いての火災にあい、さすがの白呑上人も気力を失ってしまった。もう自分ではどうすることもできない。この上は隠遁し、よい住職を迎えて復興してもらいたいと考えた。そこで常日頃から

懇意にしていた祐天上人の庵室にゆき、ことの次第を話した。すると祐天上人は、「自分には良い考えがあるので、もうしばらく我慢して住職を続けるように」といわれた。そこでしばらく月日を送っていたが、七月十四日に祐天上人は白呑上人を呼び、「自分はもうすぐ命終する。本誓寺再建のことは、極楽の蓮台上から応援するから頑張るように」といい、形見としてお名号壱幅をいただいて帰った。

祐天上人はこの翌日、七月十五日に遷化された。ところが不思議なことに、祐天上人の遷化された日から、にわがにこのお地蔵さまにお参りする人々が増え、十六日などは、夜も門をしめることができなほどであった。この後一週間は、近郊はもろろん、田舎の人々もたくさん参詣された。そして参詣された人々は、永年苦しんでいた病気がたちどころになおったという。この噂が噂を呼び、不思議な靈験はあまねく知れわたるところとなった。この様子を見た白呑上人は、祐天上人が

祐天上人のりうつりの地蔵様

大正大学教授 玉山成元

「自分には良い考えがある、もう少し我慢をしろ」といつて隠遁をとどめたのは、おそらくこのお地蔵様に心をこめたためであろうと悟った。そこで再度、本誓寺の復興に尽力し、翌年の享保四年のうちに諸堂の建立を完成した。そんなことから世間では、祐天上人が乗り移った地蔵さまといい、功德を求める人々にぎわったという。祐天上人からいただいた形見のお名号は、白吞上人隠居後に長堀又兵衛に与えられたが、のち又兵衛の考えで地蔵堂の前に左字に石刻し、信心深い人々に摺り与えられたという。

文政十一年（一八二八）の「江戸府内寺社書上」には、この当時、四間四方の地蔵堂があり、その中に身の丈四尺の石の地蔵立像が安置されていたとある。そして前立地蔵尊として身の丈二尺の木の立像があり、お地蔵さまの脇壇には、三尺三寸の祐天上人の木像と、八寸の開山文賀上人の木像が安置されていたという。本誓寺にとっては寺の開山と、事実上復興の原動力となった祐天上人を安置して、

善男善女との結縁を結んでいたのである。白吞上人は、数多く集まる参詣者のために、地蔵堂の北の方に、九尺と四間の休憩所も作ったことが記されている。また長堀又兵衛は、三十三所順拝の供養として石像の正観音像を作り、裏に祐天上人の摺のお名号をほりつけたという。しかし本誓寺はこの後、数回の災害にあり、地蔵堂ともどもなくなってしまった。ことに関東大震災には大きな被害をおこむり、境内地は一新された。それ以後ゆかりの深いお地蔵さんも正観音も忘れられてしまったが、歴史書を見るにつけ、祐天上人のご利益がいかにすばらしかったかが思い出される。